

【学位論文審査の要旨】

本論文は、保健師の家庭訪問による子ども虐待予防の支援の成果を測定する評価尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証した研究である。子どもの虐待防止は世界的な課題であり、様々な対策や対策のための研究が取り組まれている。日本の児童相談所での児童虐待相談対応件数は年間約7万件であり、毎年増加している。また、虐待による子どもの死亡数は年間50~60件であり、減少傾向はみられていない。子ども虐待予防には様々な支援方法があるが、乳幼児期の虐待予防には家庭訪問での支援が効果的であると報告されている。日本では、母子保健対策として保健師が乳幼児期の子どもを持つ家庭に訪問する制度が整備されているが、虐待が発生する可能性の軽減や、虐待の発生を防いだことを効果として測定することは非常に難しく、これらの支援の効果を測定する尺度は開発されていない。そこで、本研究は、保健師の家庭訪問による子ども虐待予防の支援の成果を測定する評価尺度を開発するために、3段階の研究方法を設定した。第1段階は、自治体保健師9名を対象とした半構造化インタビュー調査と文献検討、第2段階は、保健師等の専門職間の検討と予備調査による尺度試案（7つの構成概念、45尺度項目）の作成、第3段階は、本調査として自治体保健師を対象とした自記式質問紙郵送調査を計画した。本調査では、尺度の信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性、構成概念間の関係性を検討するために、人口2万人以上の市町村1273か所に自記式質問紙を郵送し、保健師の支援した事例についての調査を実施した。調査票の回収は431通（回収率33.9%）であり、そのうち380通を分析した結果、本尺度は7因子28項目が抽出された。第1因子（7項目）を保健師への信頼、第2因子（4項目）を育児へのいらだちのコントロール、第3因子（4項目）を基本的養育の維持と実践、第4因子（5項目）を子どもへの肯定的感情、第5因子（3項目）を子どもの健康、第6因子（3項目）を育児支援サービスの利用、第7因子（2項目）を家族のサポートと命名した。尺度のCronbach's α 係数は0.92（各因子0.80~0.91）であった。また、母親と子どもの状況にかかわる第1因子から第6因子を潜在変数として、共分散構造分析により構成概念間の関係性を検討した結果、保健師への信頼を外生変数とし、最終的に関連する内生変数が子どもの健康である構造が定量的に示された。これらの結果から、本研究で開発した尺度は、信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性が確認された。

回収率や選択バイアス、事例に関する後方視的な調査方法等の限界はあるものの、当事者への直接的な測定が非常に困難な、子ども虐待という状態像の改善あるいは悪化を、保健師の支援の効果という視点で定量的に測定できる評価尺度は、社会的にも学術的にも価値があると考えられる。また、このような評価尺度は先行研究でも報告されていない。さらに、共分散構造分析による構成概念の関係性の検討の結果、虐待予防の支援の成果として、保健師への信頼が形成されるほど、母親の育児の質や子どもの健康が改善傾向に向かうという間接的な関連が示唆された。子ども虐待予防のための支援として、最初に信頼関係を育む支援がその先の成果につながる可能性があることが定量的に検証さ

博士学位論文審査の要旨

れた意義は大きく、人員や時間を費やす家庭訪問という方法による支援効果の定量化、可視化に本尺度は有用であると考えられる。

論文審査及び最終試験では、尺度得点の解釈、主観的な内容の項目と観察項目の解釈、家庭訪問という支援に特化した尺度としての意味、対象となる母親や子どもの疾患や障害の影響、多職種の影響、家庭訪問の頻度等と評価尺度の活用の実際、家庭訪問による支援の到達目標等に関する質疑があった。学位申請者は、子ども虐待という状態像を母子の状態と保健師の判断として定量的に捉えることの困難さと限界、インタビュー調査での事例の詳細や質問紙調査で回答された事例の概観、家庭訪問という支援の時間の経過の中で活用する尺度であること等を説明した。また、今後の課題として、活用時の評価の正確性や妥当性については、実際の事例検討の際に複数の専門職により共同で評価することや、前向き調査として縦断的な評価を行うこと等を検討していることを述べていた。質疑では、概ね妥当な回答をしており、尺度項目の解釈や活用方法等、検討が必要な事項については十分に吟味し、さらに精選していくための今後の課題として真摯に受け止めていた。

以上のことから、本研究は博士論文に相当し、学位申請者が博士（看護学）の学位に相当する専門知識と研究能力を有していると評価する。